



学校だより

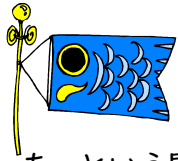
西寺尾第二小学校

5月号

令和5年4月26日

※本年度から学校だよりは月末の25日前後に発行します。

言葉の贈り物



校長 宮崎 里子

あっという間に駆け抜けていった4月でした。子どもたちは新しい担任の先生やサポートする教職員との出会いに期待とちょっぴりの不安を持ち帰ったことと思います。この1ヶ月、新しい環境にお子様も緊張していたのではないのでしょうか。張り切っている表情の子どもたちを見るにつけ、ご家庭の励ましと支えを実感し、教職員一同感謝しています。

さて、21日(金)のことです。子どもたちは午前授業で、ちょうど出張に出かける私と一緒に時間の下校となりました。駅に向かう道すがら、多くの子どもが私に話しかけてくれます。

「校長先生、さようなら。どこに行くんですか?」「これから出張で、高島町というところに行くんですよ。」「ふうん、知らない。」「桜木町の方って感じかな。」「ああー、そっち!いってらっしゃい、気を付けて!」すると他の子どもたちも口々に「お仕事お疲れ様です!」「がんばってください。」「校長先生も大変なんですね。」「…たくさんの思いやりのある言葉のシャワーを浴び、私はもう、驚きと喜びで心が満たされ、出張の憂鬱さ(?)は吹き飛んでしまいました。

日常の中のあいさつは「おはようございます」「いってらっしゃい」「お帰りなさい」等テンプレート的にたくさんあって、何気なく使っていることも多いと思います。挨拶には気持ちを添えて、という言葉聞いたことがあります。この日は子どもたちの「いってらっしゃい」に添えられたたくさんの優しく思いやりある気持ちを受け取りました。あいさつを形骸化させることなく、大人の私たちも気持ちを添えて(本来的には気持ちがありきと思っているのですが…)子どもたちとあいさつを交わしたり、会話をしたりしたいと思っています。こんな言葉が素直に出てくる子どもたち、きっとご家庭で、地域で、たくさんの温かい言葉をかけてもらっているのでしょう。そして今回のように驚き、感激する私を見て、言葉の力を実感し、「自分っていいな」と思えたら嬉しいのです。このようなことの積み重ねもまた、自己有用感を育てることにつながります。

江戸時代後期の人物で良寛というお坊さんがいます。子どもが好きで子どもたちと日が暮れるまで鞠つきに興じたり、乞われてお話をしたりする優しい方でした。良寛和尚は、「私の口から出る言葉は、すべて贈り物でありたい。」と考えていました。貧しく、何も贈るものがない。だからせめて言葉の贈り物を、という思いだったそうです。

私たちは、言葉一つで明るい気持ちになることもあれば、刃物のように心に刺さり傷つくこともあります。言葉はもとより、所作振る舞い、表情など全て、人を勇気づけることもできるし、傷つけることにもつながる。子どもたちは友達との関わりの中で、時に適切ではない言葉遣いやふるまいをしてしまうこともあります。連休明けにはいじめ早期発見のためのアンケートを行います。子どもたちが受け取った辛い気持ち、悲しい気持ちには感度を高くして素早く寄り添いたい。そして教職員一同、口にする言葉は「贈り物」であるよう心がけると同時に、子どもたちのよき理解者として一緒に考えていきます。